

## 2024年アメリカ学会第58回年次大会プログラム (要旨集)

1. 開催日 2024年6月1日(土)・6月2日(日)
2. 会場 早稲田大学早稲田キャンパス国際会議場  
大会企画委員長 下斗米 秀之 h\_shimotomai アットマーク meiji.ac.jp  
会場責任者 麻生 享志 asoes アットマーク waseda.jp

### 3. プログラム

- \* 本大会は早稲田大学大学院国際コミュニケーション研究科との共催です。
- \* タイトルの日英別は、発表言語によるものです。
- \* 今大会の分科会はオンラインで開催されます。各分科会の開催時間等は別にお知らせいたします。

### 第1日 2024年6月1日(土)

#### 午前の部

#### 自由論題報告 10:00~12:00

#### 【Session A 人種をめぐる政治と戦争 Politics and Wars over Race】国際会議場3階第一会議室

##### 1. 司会・討論者：佐藤円(大妻女子大学)

報告者：塚田浩幸(亜細亜大学・非)

「アーリー・アメリカン・ホロコーストへのアクセルとブレーキ——#VastEarlyAmerica 対立空間におけるピークオート戦争」

大航海時代以後の南北アメリカ先住民の経験をみれば、ヨーロッパ人によるジェノサイドが起きたことに異議を唱える研究者はいないだろう。しかし、初期アメリカの先住民・ヨーロッパ人関係のここ数十年の多くの研究は、先住民人口の激減や異人種間の暴力よりも(と並んで)、先住民のプレゼンスの維持と異人種間の妥協や順応を大切にしている。ジェノサイドという言葉を使う研究も、ニューイングランドやヴァージニアでの戦時の一時の言説を拾うにとどまり、16世紀から19世紀までをカバーする関係史叙述のモデルを提示してこなかった。本報告は、ジェノサイドを殺戮の前後にわたるプロセスととらえ、初期アメリカ史を貫くジェノサイドのストーリーを構築し、暴力を初期アメリカ史の異人種関係の王道的歴史叙述にすえることに寄与したい。

ジェノサイド研究は1990年代からさかんになり、予防という目的からも、ジェノサイドの前後の段階やプロセスを考察する研究が多くある。その議論では例えば、相手を「非人間化」する言説によって攻撃の心理的ハードルを下げていたとか、ジェノサイドへの主なアクセルやブレーキには経済的要因・利害関係や法規範があったなどと指摘されている。

これらの観点はこれまでの初期アメリカ史研究の重要な 2 つの動向と相性がよい。1 つ目は空間論的転回で、各地域の実際の殺戮自体は個別にみるにしても、先住民に対する「非人間化」のような思想的事柄は、一国史的というより大西洋的またはグローバルな視点が必要になる。2 点目は、北米大陸の様々な政治体や文化のパッチワークを多中心的・多方向的にみることである。ジェノサイド論は先住民とセトラの二元的対立ありきではないため、対立の構図を実際の利害関係をベースにとらえていくことを容易にしてくれる。このように本報告は、ジェノサイド一般の議論を参照しながら適用し、初期アメリカでの議論を活性化させるための土台を築きたい。

## 2. 司会・討論者：一政史織（中央大学）

報告者：増田直子（津田塾大学）

「アメリカ・フレンズ奉仕団が日系アメリカ人再定住政策に及ぼした影響——戦時転住局との関係を中心に」

1942 年 2 月に大統領強制命令第 9066 号によって日系アメリカ人の西海岸からの強制立ち退きが認められると、クエーカー教徒によって創設された社会奉仕団体であるアメリカ・フレンズ奉仕団（AFSC）はいち早くこの政策に反対した。太平洋戦争が始まる前からクエーカー教徒は日系人への差別を懸念しており、真珠湾攻撃が起こると AFSC は日系人の権利擁護のために動き始めた。日系人の強制立ち退きおよび収容を阻止できなかった AFSC は日系人を収容所から再定住させることを次善の策と考え、再定住政策に積極的に関わっていった。日系人を中西部や東部に拡散させ、社会に統合させることを再定住政策の基本方針としていた戦時転住局（WRA）も AFSC をはじめとする民間組織と協力関係を作り、これらの組織を利用した。その一方で、AFSC は自分たちの目指す日系人の再定住を円滑に実施するために WRA の保証を必要としながらも、日系人の多くが政府に不信感を持っていることから彼らの信頼を損なわないようにしながら再定住を促進するために WRA と一定の距離を保とうとした。AFSC は WRA にどのような点で協力したのか、WRA と協力関係を構築することで自分たちの考えをどのように再定住政策に反映させようとしたのかについて考察する。

## 3. 司会・討論者：黒崎真（神田外語大学）

報告者：小林勇人（日本福祉大学）

「公民権運動の転換期における福祉政策——チャールズ・エヴァーズの戦略をもとに」

本報告は、南部公民権運動の指導者チャールズ・エヴァーズが、1960 年代後半から選挙政治へと移行していくなかで構想した福祉政策の意義を明らかにする。第一に、エヴァーズの略歴を概観し、彼がミシシッピ州の公民権運動で自警団に支えられたボイコット運動を成功させていたことを指摘する。第二に、エヴァーズが挑んだ 1968 年連邦下院議員選挙と 1971 年ミシシッピ州知事選挙を中心に、彼の戦略を分析する。第三に、福祉政策につ

いて貧困者を統制する側面と貧困問題を緩和する側面の両義性をもつものとして捉え、エヴァーズの構想を考察する。

1960年代後半に、公民権運動は戦略を転換して徐々に社会的経済的な権利に焦点化し、福祉の課題にも関心を抱くようになったが、多くの公民権団体にとって主要課題は雇用であった。エヴァーズは、全米黒人向上協会のミシシッピ州支部の地域統括責任者として活躍し、ボイコットに武力抵抗を組み合わせたというパラダイムを築いた。だが彼は1968年以降ボイコット運動を解除し、選挙政治へ移行した。1969年に彼はミシシッピ州フェーエット市長選で当選し、同州で再建期以降に官職に就いた初めての黒人となった。

先行研究で、エヴァーズの福祉政策を分析したものは多くはないが、彼はワークフェアの考案者として言及され注目もされた。ワークフェアは、就労可能な福祉受給者に受給条件として労働や労働関連の活動を要請する政策を指し、1970年代以降の福祉政策を特徴づけた。Piven等の議論を援用すれば、エヴァーズは既存の政治体制へ吸収され、制限的な福祉政策を考案するようになったといえる。だがそのような解釈は妥当であろうか。本報告は、1960年代後半を公民権運動の転換期として捉え、選挙資料をもとにエヴァーズが社会福祉の拡充策や負の所得税などを掲げていたことを示しつつ、彼が構想した福祉政策の意義を考察する。

#### 【Session B 身体性とウィルダネスの再想 Reimagining the Corporeality and Wilderness】 国際会議場 3階第二会議室

4. 司会：中垣恒太郎（専修大学）

討論者：山口和彦（上智大学）\*司会者によるコメント原稿代読

報告者：森兼寛登（広島大学・院）

「Cormac McCarthy の The Border Trilogy における手の表象と宗教性」

Cormac McCarthy は、*All the Pretty Horses*、*The Crossing*、*Cities of the Plain* から成る The Border Trilogy において、登場人物たちの故郷が失われていくさまを描き出した。*All the Pretty Horses* の主人公であるカウボーイのジョン・グレイディ・コールは祖父の牧場が売却されたことをきっかけに、前近代的なユートピアを求め、テキサスからメキシコへと旅立つが、ラ・プリシマ牧場で出会うメキシコ人の恋人アレハンドラとの別れの場面が駅であることから示唆されるように、近代化の波からは逃れられない。また、*The Crossing* の主人公であるビリー・パーハムはニューメキシコから米墨国境をこえて旅をするが、その過程で両親と弟のポイドを失い、最終的にトリニティ実験を目撃する。そのため読者はビリーの故郷喪失と共に失われゆく南西部を目の当たりにすることとなる。

一方、The Border Trilogy における故郷喪失という問題系を考察する時に留意すべきなのは、これらの登場人物が必ずしも時代の被害者として提示されているわけではないことである。むしろ、アメリカ人であるジョン・グレイディとビリーはメキシコにおいては不法侵入者とみなされ、両国の植民地主義的關係を暗示する。また、*The Crossing* において

ビリーがメキシコから流れ着いた雌狼と目を合わせる場面には、自然を攻略せんとする人間の欲望を透かし見ることができる。そうした欲望を抱いたことに対する代償であるかのように、ビリーは故郷から次第に疎外されていく。

本報告が目にするのは、故郷喪失と「目」の描写の相同関係に対してビリーの「手」の表象がどのように位置づけられるかという問題である。この文脈において *Cities of the Plain* の結末に登場するビリーの手の血管が「地図」に喩えられるのは興味深い。ビリーの手の上に浮かび上がる「地図」とは植民地主義の含みを持たず、故郷を喪失した人間にとっての「地図」になりえているのではないか。この場面を中心に報告者は *The Border Trilogy* における手の表象と宗教性との結節点を明らかにする。

5. 司会・討論者：Yuki Maruyama 丸山雄生 (Tokai University 東海大学)

報告者：Azumi Sakamoto 阪本杏実 (Graduate Student, Waseda University 早稲田大学・院)

“African “Killer” Bees in 1970s Horror Films: An Interplay of Scientific, Social, and Cultural Discourse”

This paper examines a group of B-grade horror films in the 1970s featuring African “killer” bees – a monster that became popular due to the accidental spread of Africanized honeybees in the American continent which became a media sensation and concern for the U.S. public around the mid-1960s. This paper analyzes the films within the context of the social and scientific discourse of the “killer” bee phenomenon. Bearing in mind that a thorough analysis of ecological discourse approaches nature as, to borrow Donna Haraway’s words, “a co-construction among humans and non-humans,” this study considers the social and cultural influences in the examination of the scientific discourse of the Africanized honeybees, and in turn, analyzes the cultural discourse with regard to the biological and ecological impact of the bees.

The African honeybees were known for abundant honey production but also for their aggressiveness. The Brazilian geneticist who imported the bees attempted to “erase” the aggressive trait with cross-breeding but was not successful. Soon after, the hybrid bees escaped the testing sights and spread rapidly across the American continent. Since beekeeping practices and bee ecology in general played a significant part in U.S. agriculture and food production, the news of the aggressive bees was met with warning and expressed with highly anthropomorphized language that evoked images of war and invasion from both the scientific community and the popular press, which gave them the nickname “killer bees”. The threat of the bees to the U.S. economy and livelihood inspired accounts on the bees to be embellished with language beyond what can be called strictly scientific.

The films in varying degrees and emphasis reflect this scientific and social discourse

of the “killer” bee incident. At best, the films succeed in deconstructing anthropocentric hierarchy by emphasizing the connection between bees and human lives. At its worse, however, the films take the military and war imagery to its extreme and appropriates the aforementioned deconstruction to naturalize and justify such aspects of human behavior. The anxiety regarding environmental issues is displaced onto the “killer” bees and the violence against them are essentially posed as “solutions”. In effect, the “invasion” rhetoric used in scientific and social texts is narratively realized, presenting consequences not only for culture but also for scientific discourse. By examining the Africanized honeybee incident, this paper highlights the importance of studying the interplay of scientific, social, and cultural factors in ecological discourse.

6. 司会・討論者：Keita Hatooka 波戸岡景太 (Hosei University 法政大学)

報告者：Kerong Chen (Graduate Student, Waseda University 早稲田大学・院)

“Cold Mountain, Groovin’: An Imagined Wilderness as the *Counter*-Rhythm to the Fusion of a Beatnik “Americanness””

Through examining how Han-Shan, a Chinese poet from the Tang Dynasty (618-907 AD), was integrated into the Beat Movement in the 1950s, the paper intends to elaborate how Cold Mountain (the English translation of Han-Shan) was invoked and in a sense invented as an imagined wilderness as well as a space of otherness to counter the “Americanness” that had long been loathed by the Beats. The term “counter” does not suggest a unilateral resistance, but a complementation to the intrinsically ambiguous “Americanness.” Since any attempt to define an identity risks being reduced to oversimplified characterization, the paper is not interested in solely summarizing how Cold Mountain and Zen Buddhism was (mis)appropriated as a symbol of a so-called rebellious spirit by the Beats and the countercultural movement, nor criticizing how Han-Shan, Zen Buddhism and Chinese culture were objectified in a Western imagination (for such a criticism is established upon a belief that a solid “authenticity” and “original” can ever be accessed). Instead, the paper is more concerned how Beat Generation as a counterforce was eventually absorbed by/into the system of identity politics and become one of the most prominent canons of “Americanness.” The introduction as well as the internalization of Han-Shan, which stands as a radical otherness, is in fact an inevitable political move. Moreover, against the grand historical narrative, the Beat Movement indeed opened up a potentiality for political discourse. Cold Mountain in this process should not be approached as cultural appropriation, but rather it composed a counter-rhythm to the “Americanness” perceived by the Beats and expressed a Beatnik “feel” that constituted a “virtual” (in a Deleuzian sense) Americanness. As the long-lasting conundrum of identity politics often concerns an immanent touch of “indescribability,” (“identity” to

some extent is not only to be articulated, but to be felt), the paper plans to introduce a musicological concept, “groove,” which is commonly employed to describe the effect/atmosphere of music among musicians and listeners, to the inspection of identity, and hopefully to enrich the discussion over identity politics.

**【Session C 文学と映画におけるアイデンティティと抵抗 Identity and Resistance in Literature and Film】 国際会議場 3 階第三会議室**

7. 司会・討論者：Michael Larson (Keio University 慶応義塾大学)

報告者：Jiro Morishita 森下二郎 (National Institute of Technology, Kagawa College 香川高等専門学校)

“Apologetic Authority and Victorious Victimhood: The Cold War, Postmodernism, and Post-Feminism in Donald Barthelme’s *The Dead Father* (1975)”

Uncomfortably situated in the midpoint of his writing career spanning from 1963 to 1990, Donald Barthelme’s *The Dead Father* (1975) – his second novel in which a decrepit yet autocratic father named the Dead Father is hauled across the landscape with a cable by a peripatetic band spearheaded by his son, Thomas, in order to find the golden fleece that will rejuvenate the father only to find himself buried in a great hole in the ground – is notorious for inviting a wide variety of conflicting interpretations. That said, there are two influential strains of reading this farcical quest myth. The first type of reading is to detect the motif of patricide in its parodic descriptions of the Dead Father and signal the end of Oedipal tradition; the second type of reading is to highlight the irrationality of girls’ talk between Julie and Emma to argue that the female characters are struggling to resist the incorporation into the patriarchal order. Despite the discrepancy between these two interpretations, they share a premise that the traditional authority of patriarchy still holds sway, whose egregiousness sanctions sardonic critiques from the oppressed. Insofar as the challenge to this totalitarian authority is waged in a decentering manner, these interpretations consider *The Dead Father* a postmodern fiction.

In contrast with the standard readings of *The Dead Father* as postmodern that tend to revere its emancipatory potential, this presentation refers to recent studies on postmodernism that view this literary-critical concept as authoritarian rather than emancipatory and focuses on the equivocal nature of postmodernism by exploring power dynamics within the two battlefields of patriarchy, i.e. father vs. son and man vs. woman. *The Dead Father* shows that the traditional authority of patriarchy has already been extirpated by postmodernism, and that the sentiment of victimhood is exploited by the postmodern characters to protect themselves from critical scrutiny. In other words, Barthelme understands postmodernism as a quasi-emancipatory politics whose authoritarianism is concealed by

machinations of feigned victimhood. *The Dead Father* thus points to a new direction of Bartheleme's study that reads his oeuvre not as postmodern but as post-postmodern, a critical reflection on the legacy of postmodernism.

8. 司会・討論者：Yukihiro Tsukada 塚田幸光 (Kwansei Gakuin University 関西学院大学)  
報告者：Kenta Kato 加藤健太 (Graduate Student, Waseda University 早稲田大学・院)  
“The Temporality of Male Melodrama in Clint Eastwood Films”

This paper examines the function of temporality in male melodrama, using the films of Clint Eastwood as case studies. Temporality has been one of the central components of melodrama because its narrational mode hinges on events that are too late to change. This temporal structure of melodramatic narrative is one of the factors that evoke an emotional response from the audience, as it leads to the desire for “if only” and a sense of hopelessness from how change seems impossible. Although the melodramatic temporality can be defined to be “too late,” the films of Eastwood complicate this paradigm. Through textual analysis of Eastwood's male melodramas, this paper looks at how the notions of “too late” and “just in time” are intertwined in constructing and perpetuating ideas of masculinity.

One of the notable characteristics of recent directorial works by Eastwood is the depiction of ethical dilemmas in American society: violence and revenge in *Mystic River* (2003) and *Gran Torino* (2008), euthanasia in *Million Dollar Baby* (2004), and the trauma of war in *Flags of Our Fathers* (2006) and *American Sniper* (2014). While these films narrate tragic events that cannot be changed, their too-lateness sets the stage for male protagonists to confront ethical dilemmas. In particular, the tragedies involving women and minority groups – the death of a daughter in *Mystic River*, the half-blindness of a black ex-boxer in *Million Dollar Baby*, and the rape of a Hmong neighbor in *Gran Torino* – provide opportunities for male protagonists to endure suffering from events that could have been prevented but are now irrevocable. Thus, for Eastwood heroes, the unalterable circumstances of supporting characters serve as a setup for the ending or main narrative, in which men's ethical struggles can take center stage. Torn between the melodramatic impasse of right and wrong, male heroes must make decisions to confront the situation and compensate for tragic events, eliciting tears from the audience. In short, being “too late” is, in fact, “just in time” for Eastwood's male melodramas. This implies that sentiment is generated not by the wish for “if only” but by the moral obligation of “I must,” constructing an idealized, heroic masculinity through the emotional attachment of the viewer.

9. 司会・討論者：Yuko Miyamoto 宮本裕子 (Rikkyo University 立教大学)  
報告者：Ka Sin LEE (Graduate Student, Waseda University 早稲田大学・院)

“Deglamorizing the Star in Same-Sex Romance: The Subjectification of the Star-Embodied Lesbian Body in *Disobedience* (2017)”

This paper examines how the lesbian-themed film *Disobedience* (Sebastián Lelio, 2017) subjectifies its two female protagonists, played by star-actresses Rachel McAdams and Rachel Weisz, through the close-up—a tightly framed shot that focalizes the stars’ faces, bodies, and performances. According to Mary Ann Doane (“The Close-Up: Scale and Detail in the Cinema,” *differences*, 2003), the magnified face in the close-up entails multiple dichotomies, namely the surface and the beyond, the minute and the monumental, and the individual and the shared. Watching a close-up of the star-actress in a contemporary lesbian-themed film, the viewer does not so much behold an isolated beauty soon falling back in the heterosexual embrace as ponder over all those visualized dichotomies and her fate in a socially forbidden relationship. More importantly, lesbian stories themed on self-discovery and taboo romance allow us to see the star-actresses deglamorized on a physical/visual level and giving nuanced yet profound performances. Rachel McAdams’s Esti and Rachel Weisz’s Ronit in *Disobedience* are two such lesbian characters, who are frequently featured in close-ups that expose every line, mole, bump, blemish, imperfection, or the slightest change of expression on their faces, and carry an emotional truth about lesbians as complicated social beings.

With a focus on the visual depictions and narrative representations of its two lesbian protagonists, this paper argues that *Disobedience* has close-ups of the stars’ faces and bodies manifested as sites of lesbian subjectivity, as a conditioning and enunciating force, and as an aesthetic device that foregrounds the star-embodied lesbian’s agency. The close-ups in *Disobedience* are both of a presentational, isolative mode and of a reciprocal nature. Such reciprocity is often achieved by alternating close-ups against a superficial conversation, meaningful silence/emotional dialogue, or relationship struggles. By analyzing scenes from *Disobedience* that contain close-ups of star-embodied lesbians, this paper addresses the use of the close-up in portrayals of lesbian subjectivity, which works simultaneously for the character and the star and yet against the star persona, as well as the ways in which the star’s presence and body subjectify and hence humanize the lesbian figure. Furthermore, alternating close-ups of the two star-actresses mobilize the star-embodied lesbians’ reciprocal feelings and thoughts on the narrative/narrational level and facilitate concurrent emotions and affect refracted in their previous screen identities and public images on the spectatorial/phenomenological level.

休憩	12:00～12:30	
理事・評議員会	11:30～12:00	国際会議場 1階井深ホール
授賞式	12:00～12:30	国際会議場 1階井深ホール



午後の部 国際会議場 1 階 井深ホール

ASAK 会長講演 12:30~13:00

司会：Kazuhiro MAESHIMA 前嶋和弘 (Sophia University 上智大学)

報告者：Jee Hyun An (Seoul National University)

“Toni Morrison's *Home* and the Cold War: Reconfiguring American Studies”

### シンポジウム「統合と分断のアメリカ大陸会議開催 250 年」13:00~16:00

過去数十年にわたりアメリカの政治と社会は分断を深め続けている。連邦議会の機能不全は近年の分断の激化を象徴するものといえる。ただ、歴史を振り返れば、党派、地域、イデオロギー、人種・エスニック集団等で分裂・対抗を繰り返しており、分断はアメリカ史の常態であるとも言えよう。2024 年は、限定的な試みを除き政治的に団結することがなかった英領植民地が本国の強硬な態度に対し一致した姿勢を示しアメリカ合衆国誕生への一歩となった第 1 回大陸会議が開催されて 250 年にあたり、また、政党制が切り替わる時期と重なる 1824 年の大統領選挙から 200 年にあたる。このような記念の年に、分断と統合を軸にアメリカとは何かを改めて考える機会としたい。

本シンポジウムでは、建国時代から現代に至るアメリカにおける統合と分断の諸相を、あえて広く、党派、思想、人種を中心とした切り口を、政治思想、歴史、文学・文化の専門家による問題提起を元に考えてみたい。建国当初、英国から独立した州を結びつけていた理念は何だったのか。初期の党派対立とはどのようなものであり、何が協力、そして統合を可能にしていたのか。人種（先住民）の視点からは、入植者への対応をめぐる先住民は一枚岩だったわけではないが、どのように先住民としての意識でまとまり、部分的であれ「アメリカ国民」として統合されることを考え始めたのか。アメリカ史における分裂・分断の契機はこのように枚挙に暇がないが、国家機構においては南北戦争を除き、決定的な分裂を経験していない。分断のざわめきの裏で分裂を抑える力—統合の力—には何があるのだろうか。

統合と分裂という、使い古されたとも思われるテーマが、アメリカ学会でのシンポジウムで掲げられたことは実のところこれまでになかった。本シンポジウムは分裂の様相が際立つ現在、そして様々な記念の 2024 年に、建国から現代に至るまで、アメリカにおける分断と統合を学際的・包括的に検討する機会としたい。

司会：矢島宏紀 (昭和女子大学)・菅 (七戸) 美弥 (東京学芸大学)

討論者：小倉いずみ (大東文化大学・名)・岡山裕 (慶応義塾大学)

報告者：

森丈夫 (福岡大学)

## 「イロコイ連合と「隣人たち」の200年——同盟・支配・分裂の17-18世紀大陸史」

本報告では、「分裂と統合」というシンポジウムテーマについて、17-18世紀の北米北東部を舞台として設定し、イギリス領北米植民地も含めた諸勢力間に結ばれた同盟関係とその破綻について論じたい。近年の初期アメリカ史の広域的視点 Vast Early America でも強調されるように、ヨーロッパの植民が引き起こした先住民社会の破壊の中にあっても、ヨーロッパ勢力と先住民の間には頻りに同盟関係が結ばれていた。とりわけ18世紀にはあらゆる植民地が近隣の先住民と条約を介して同盟関係を結ぶようになり、本国政府も「インディアンとの相互理解」を構築するよう植民地政府に奨励していた。植民地と先住民の代表は、毎年、オルバニーやモントリオールといった境界都市に集い、先住民式の外交儀礼を用いて会合を開いて同盟を更新し、協議を行ない、また宴席を共にしていたのである。アメリカ独立を境にして、かかる同盟関係は消滅していく。本報告では、特にイロコイ五(六)部族連合とヨーロッパ植民地の間で結ばれ、多大な影響力を持った同盟「盟約の鎖」を取り上げ、同盟の性格を検討することで、いかなる世界からアメリカ合衆国は立ち上がったのかを考えたい。むろん同盟の存在は、ヨーロッパ諸勢力と先住民の間に平和共存関係が成立していたことを意味しない。それどころかイロコイとイギリス植民地間に典型的に見られるように、ヨーロッパ勢力にとって先住民との同盟は先住民に戦争を代行させ、土地を譲渡させる手段であった。とはいえ、同盟関係のありようは、ヨーロッパ人の意向によってのみ決定されたわけではない。また時期によって両者の関係性も大きく異なっていた。報告では、1609年のオランダ人との通商同盟に端を発するイロコイ連合—ヨーロッパ諸勢力の同盟が、植民地の経済・人口の急速な発展の中で、どのように展開したのか、そして諸勢力を包摂する歴史=大陸史においてどのような役割を果たしたのかを論じていく。

石川敬史(帝京大学)

### 「革命機関としての邦議会と帝国としての連邦政府」

今日のアメリカ諸州の歴史的基盤あるいは原風景が、イギリス領北アメリカ植民地13邦であったことは確かだがその強力な自立性については、踏み込んだ考察が必要である。植民地時代のいわば旧体制下の植民地諸邦が漫然と独立後の州に移行したわけではない。やはり1776年が重要であり、この時期にイギリス本国から来た総督たちが帰還し、それまで邦政府の役職についていなかった人々その座に就くという諸邦の権力エリートの交代があり、通商規制委員会、公安委員会が組織され、さらに大陸会議が諸邦に方憲法の制定を勧告することで、諸邦の国家的性格が強まると同時に、邦議会が革命機関化していったことに着目すべきであろう。

これが1783年のパリ条約によってアメリカ合衆国の独立が国際的に承認された後の統治状の問題になった。合衆国憲法の叩き台となったヴァージニア・プランを読む限り、1787年の憲法制定会議に出席し、それに署名を行った人々は、そもそも連邦制国家としてのアメ

リカ合衆国を望んでいたかは疑問である。彼らは一つの国家的政府を創設しようとしていたはずである。そうした企図の最大の関門は邦の強力な自立性であった。連合会議は 1785 年の公有地条例でイギリスから割譲された領土を連合会議の管理下に置き、1787 年の北西部条例で北西部テリトリーが州に昇格する仕組みをつくった。これが計画的なものであったかは推測の域を出ないが、新たな州をつくることによって、既存の諸州に対抗する仕組みとなりえた。しかし、一つの国家的政府の創設という観点から観ると実にアンビヴァレントなものである。

ハミルトンは『ザ・フェデラリスト』第 1 篇で、アメリカ合衆国をやや無造作に「帝国」と呼称しているが、本報告では、一つの主権国家を創設するというプロジェクトが実は今日に至るまで（南北戦争を経てもなお）成功していない「状態」が、アメリカ「帝国」の国制の内容であったのではないかという視座を提示する。

鈴木透（慶応義塾大学）

「物語が作ったアメリカ—危機と統合の文化史」

アメリカ研究の使命が、「アメリカとは何か」という根源的な問いに対する答えを用意することであるなら、「社会内部の深刻な亀裂にもかかわらず、なぜこの国では統合への求心力が維持されてきたのか」という素朴な疑問を無視することはできまい。本報告では、文化史やインテレクチュアル・ヒストリーの観点からはこれをどう説明できるのか、現実を物語化して認識しようとする言語的構築物の系譜から考えてみたい。

これまでもアメリカは幾多の試練を経験してきたが、その度に繰り返し出現するイマジネーションがある。それは、現実の危機を「物語の途中」の通過点へと変換し、自らの未完成さを再認識することで、未来に向けた共同体の奮起を促そうとするレトリックである。ここでは、こうした現実の物語化の土台が、手前勝手な解釈のリスクや完全さへのオブセッションを伴いつつ、植民地時代のピューリタンや独立革命期の知的風土にまで遡れることを確認するとともに、この種の思考様式が、エイブラハム・リンカン、ランドルフ・ボーン、マーティン・ルーサー・キング Jr.等、社会的危機と対峙した人々の発言の中に、その後時代を超えて世俗化された形で繰り返し登場する点に注目する。そして、現在地を未来との位置関係において時間軸上で相対化する文化的伝統こそが、深刻な分断を乗り越える統合のベクトルの重要な復元力となってきた可能性を指摘し、現代アメリカにおいてこうした自国の未完成さに対するイマジネーションを取り巻く状況に果たしてどのような変化が見られるのかについて、「ドナルド・トランプの連呼するスローガンが“Make America great again.”であって、決して“Make America greater.”でないことは何を意味するのか」という点を含めて検討し、現実を認識するための言語表現の選択が、統合と分断をめぐるこの国の運命をどう左右しうるのかについて考えたい。

松本俊太（名城大学）

「三権の筆頭格としての連邦議会とその地位の低下」

アメリカ合衆国の政治は、いつどのようにも「分断」しうるほど多様な人々が緩やかに「統合」されることによって、230年以上前に制定された合衆国憲法の下で続いてきた。そのメカニズムのうち、本報告がとりあげるのは、政党と連邦議会である。

アメリカの政党は、州以下のローカルな組織やあらゆる公職者を緩やかに結びつけるネットワークに過ぎない。連邦政府の三権の1つをなす連邦議会においても、議員は、院内の党組織に所属しながらも自律的に行動する。そして、議会が三権の筆頭格と目されてきたのは、議員が代表する多様な利害の対立と妥協を経て、立法を中心とした国の最終的な意思決定を担ってきたことに求められる。

こうした状況が、この半世紀の間、緩やかかつ着実に変化してきた。1つは、少なくとも政治の場においては、国民も公職者も、二大政党の下に「統合」される一方で、二大政党間の「分断」が進んだ。これを政治学では、「二大政党の分極化」(party polarization)という。もう1つは、議会でも分極化が進行することで、立法機能や有権者からの支持などの面で議会の機能が低下した。そして、遅くとも2010年代には、議会政治が、大統領選挙を頂点とした政党間の対立に従属することになった。このような、分極化が議会の地位を低下させたとの議論は珍しくない。

しかし、因果関係の連関を辿れば、1970年代以降の議会が院内の政党組織を強化するような改革を自律的に行ったことが、皮肉にも、議会に政党政治が持ち込まれる一因になったのではないか。これが本報告の主張である。これを検証するため、1950年代のサム・レイバーン(D-TX)、1970年代のティップ・オニール(D-MA)、1980~90年代のニュート・ギングリッチ(R-GA)の3人の下院議長(就任以前の時期も含む)が、議会改革を求める議員の声にどう対応したかを確認し、同じ改革といっても、その意図や主導者が変質してきたことを明らかにする。

第2日 2024年6月2日(日)

午前の部

部会・ワークショップ 10:00~12:30

【ワークショップA OAH-JAAS Workshop: Human Rights, Secrecy, and Cultural Diplomacy in Twentieth-Century America】国際会議場3階第一会議室

Chair: Itsuki Kurashina 倉科一希 (Doshisha University 同志社大学)

Speakers:

Sam Lebovic (OAH, George Mason University)

“The Japanese Spy Scare and the Origins of American Secrecy”

The Defense Secrets Act of 1911 was the first peacetime secrecy law in US history.

This paper reveals the history behind the passage of this forgotten law, which shapes national security secrecy until the present. The 1911 law, this paper shows, was enacted during a moral panic about Japanese spies on the West Coast of the continental US and in American colonies in the Pacific. Based on new archival research – particularly into the records of Congressman Richmond Hobson, the bill’s sponsor – this paper shows that the Japanese Spy Scare was whipped up by advocates of U.S. naval supremacy in the Pacific, and tapped into racialized fears of imperial weakness and decline. It compares this moral panic to similar fears about German spies in France and England, and shows how the imperial and cultural dynamics of this early twentieth century moment produced laws which undermined American democracy throughout the twentieth century, and continue to do so today.

Hideaki Kami 上英明 (The University of Tokyo 東京大学)

“Havana’s USA: Sister Cities, Sports, and the Making of People-to-People Communication”

This study assesses the shadowy and omnipresent exercise of Cuban cultural statecraft competing with U.S. promotion of people-to-people exchange in the post-Soviet world. In contrast to works observing how the world’s lone superpower tried to extend its cultural influence abroad and introduce change within the last remaining socialist societies, this investigation contemplates how non-U.S. nations have intervened in the United States through their promotion of culture, exchange, and engagement despite the sheer power imbalance. It argues that Havana’s political influence operators vehemently contested Washington’s regime change pursuit by converting the United States into the principal arena of their counterhegemonic statecraft. This reimagination of the U.S. superpower, no less as a central agent of power than a central battleground for support and legitimacy, aimed to make the United States understand the world, instead of making the world understand the United States.

Carl Bon Tempo (OAH, SUNY Albany)

“Human Rights and Free Market, 1975-1990: The View from Outside the Ivory Tower”

This paper explores how some important outlets in the popular conservative media – the Wall Street Journal and Human Events – conceived of the connections between two of the most powerful sets of ideas in late twentieth century U.S. politics: human rights and neoliberalism. While scholars, especially Sam Moyn and Jessica Whyte, have wonderfully shown how political and intellectual elites made (or did not make) links between free markets and human rights, this paper examines the rather tenuous foothold of the human rights/neoliberal idea in the popular conservative movement – and the ramifications of that precarity for the place of human rights in modern American political culture.

## 【部会 A 西部フロンティアをめぐるアメリカ大衆文化の想像力・再考】国際会議場 3 階第二会議室

「西部」フロンティアはアメリカ大衆文化における想像力の源泉であり続けてきた。神話化された「オールド・ウェスト」のイメージを代表する「西部劇」は、その先住民族表象やジェンダー規範などの観点から批判的に検討されることにより、ジャンルの変容・衰退をもたらしたが、その西部劇研究をも含めた細分化した個々の領域にてアメリカ西部をめぐる研究は近年、新たな成果が顕著な動きを示している。アメリカ大衆文化の想像力の源泉としてのアメリカ西部像はメディアをこえて、ナショナルな枠組みをこえて、日本をも含むトランスナショナル／グローバルな西部言説が新たに生成され、映画、小説、詩、音楽、漫画などの多彩なメディア文化を彩ってきた。こうしたアメリカ西部表象の変遷史を、ポストウェスタン、ニューウェスタン、グローバルウェスタンなどの近年の西部研究の文脈を交えてメディア横断的に再検討する。

本部会では、西部フロンティアをめぐるアメリカ大衆文化の想像力を、西部劇ジャンル、民衆詩、カウボーイ・カウガール表象、ウェスタン・ミュージックの民俗・音楽文化、「西部」言説史の生成と変遷、日本におけるアメリカ西部像などの観点を学際的に交錯させながら、日本におけるアメリカ大衆文化研究の行方を展望する。最新の研究動向を参照しつつ、アメリカ文化の根源をその「荒野性」に探った先達としての亀井俊介『荒野のアメリカ』（1987）、『アメリカン・ヒーローの系譜』（1993）をはじめとするアメリカ大衆文化研究の文化的遺産をどのように更新・継承することができるだろうか。さらに、スターの文化社会学、地理的ナショナリズムと「ジオポエティックス」、ジェンダー／セクシュアリティ、比較文化およびアダプテーション研究の観点などにも併せて目を向ける。

司会：石原剛（東京大学）

討論者：ウェルズ恵子（立命館大学）

報告者：

井上博之（東京大学）

「『荒馬と女』におけるマリリン・モンローと西部の変容」

アーサー・ミラー原作・脚本、ジョン・ヒューストン監督による『荒馬と女』（*The Misfits*, 1961）は複数のレベルにおいてなにかの終わりをめぐる作品であり、虚構と現実を交錯させる映画である。マリリン・モンローにとってもクラーク・ゲーブルにとっても最後の出演作となったこと、ミラーとモンローの結婚生活が終焉に向かうなかで制作されたことなどの映画の周辺事情もあるのだが、『荒馬と女』が古典的な西部劇で描かれてきた再生の空間としての神話的な西部が不可能になった時代の西部の物語を提示する映画である点も重要である。

第二次世界大戦後のネヴァダ州リノの都市空間から始まるこの映画において、西部はすでに都市化・商業化の進んだ場所であり、そのような環境でカウボーイとして生き続けよ

うとする男たちはもはやヒロイックな存在ではない。変容する西部のなかで時代錯誤的なアンチヒーローとならざるをえない男性たちに翻弄されつつも、彼ら自身を変化させる役割を担うのがモンローの演じるヒロインである。亀井俊介は『アメリカでいちばん美しい人』でこの映画を「『人間』として」のモンローの「到達点を示す傑作」と呼んだ。ミラーが妻であった彼女のために書いた脚本は登場人物としてのロズリンと俳優・生身の人間としてのマリリン・モンロー／ノーマ・ジーンとの境界線を曖昧にするものであり、彼女自身の映画内での演技もまたそのような曖昧さを抱えている。西部劇と結びついてきた神話的な西部と現実の西部の対比だけでなく、モンローの演じる人物においても虚構と現実が交錯する。

本発表では近年のポストウェスタンや映画俳優・スターをめぐる議論なども参照しつつ、具体的な映像や演技の分析をとおして、『荒馬と女』における変容する西部とそのヒーロー／ヒロインの姿を考えてみたい。

関根路代（日本工業大学）

「ホイットマンの「西部」——ジオポエティックスの観点から」

ウォルト・ホイットマンは、*Leaves of Grass*において、アメリカ大陸の多様なジオグラフィを列挙（カタログ手法）することで「地図」を作り、それをアメリカの芸術とした。そのなかで「西部」は、未開拓の「自然」と結びつき、民主主義が達成されるべき場所として描かれている。ホイットマンが開拓者の物語や国の領土拡大を詩に書いたという事実は疑いようもなく、そこには Eric Kaufmann が述べるような2つの地理的ナショナリズム（“the naturalization of the nation”と“the nationalization of nature”）が現れていると言えるだろう。

そのようなホイットマンの「西部」であるが、本発表では、ジオポエティックスの観点から眺めることで、「地図化」の文脈において「西部」が二重の意味——アメリカ大陸の「西部」であり世界の「西」に位置するという——を持つことに加え、場所をめぐる文化の記録が刻み込まれた地質学的な声を見いだしてみたい。ジオポエティックスとは、形式に注目することで、文学の創造と空間との相関に取り組む観点であり、“geo”「地球／大地」を経験の中心におく詩的試みである。これまであまり紹介されてこなかったホイットマンが収集した地理に関する資料（Cultural Geography Scrapbook）や、“Song of the Redwood-Tree”他数篇の詩を検討し、ホイットマンの「西部」を俯瞰する。

永富真梨（関西大学）

「カントリー音楽のクィアな西部——ジェンダー/セクシュアリティと階級の交差する場所」

2010年代半ば以降のカントリー音楽研究は、カントリーの保守的なイメージとは異なる表象や言説(Hubbs 2014)、非白人 (Royster 2022, Jacobsen 2017) やクィアの人々による

実践 (Goldin-Perschbacher 2022) を考察し、人種・階級・ジェンダー・セクシュアリティが複雑に交差するアメリカのポピュラー音楽文化における力学とそれらに抵抗する人々の主体性を解明している。その端緒を作ったジェンダー研究者のナディーン・ハップスは、カントリー音楽が労働者階級のイメージと共に想起されるために、時代によって変化する中産階級的な価値にそぐわないイメージや価値がステレオタイプとして付与されることが多いと論じる。特に 1970 年以降は、同性愛を擁護する価値が中産階級化されたために、カントリーの演奏者や愛好者が同性愛嫌悪であるというイメージが強化されたという。そのためにジェンダー規範の逸脱や、同性愛を擁護する表現を有するカントリーの楽曲は可視化されてこなかった。

本発表では、ジェンダーとセクシュアリティの規範の再解釈を迫るような、日米のカントリー音楽におけるカウボーイ・カウガールを含む西部に関わる表現やパフォーマンスの歴史を辿る。先行研究を参照しながら、これらを可能にした歴史的背景も紹介する。最後に 2010 年代後半から隆興する非白人やリベラルの若者がカウボーイ・カウガールに扮する文化運動「イー・ハー・アジェンダ」と連動するカントリーの楽曲がいかにアメリカ合衆国やカントリー音楽産業におけるジェンダーとセクシュアリティの規範を広げようとしているかの分析を試みる。

鈴木紀子 (大妻女子大学)

「トランスナショナル・ウェスト——戦後日本の西部劇漫画における『西部』の受容とアダプテーション」

第二次世界大戦後の 1950 年代から 60 年代始めにかけて、日本では少年雑誌を中心に「西部大活劇」と呼ばれる西部劇漫画・絵物語が大流行した。当時日本は西部劇映画人気の絶頂期にあり、その余波は、各地で行われた西部に関する展示会やショー、西部を歌う歌謡曲の流行などにおよび、「西部」は大いに人々の関心を集めた。『おもしろブック』などの少年雑誌は、1950 年代をピークに相当数の西部劇漫画を掲載、更に西部劇映画と劇中スターの紹介や開拓時代の歴史的説明など、多くの紙面を西部関連に割いた。山川惣治、小松崎茂、手塚治虫など日本の漫画界の巨匠達の西部大活劇は、各誌の目玉のひとつであった。

現在多岐にわたる西部劇映画研究に比べ、漫画の研究は非常に少なく、西部劇漫画は映画の模倣物や娯楽とみなされがちである。しかし西部劇漫画は、作者が読者に向け「西部」を再現する創造的行為であり、その西部表象には日本人の西部、延いてはアメリカに対する眼差し、更に戦後日本の自己意識が投影されていると思われる。すなわち、西部開拓をアメリカの文明化と国家発展の歴史とみなす西部言説を受入れ、その歴史に畏敬と憧憬の念を抱きながら、白人中心的な西部の言説に抵抗・挑戦し、かつ開拓者精神に日本の精神を見出し共感を寄せ、更には戦前からの日本の拡張主義的思想を西部に重ね合わせ正当化する姿勢が見られるのだ。



本報告では、上掲山川・小松崎・手塚ら戦後を代表する作家達による西部大活劇、とりわけ山川惣治の西部絵物語に焦点を当て、戦後日本の西部言説の受入れと挑戦、再創造という多方向的な西部受容を考察し、言説的西部フロンティアが戦後日本の社会文化形成に深い関係性を持っていたことを指摘する。併せて、この研究を通し、アメリカ独自のものたる「西部」が国や文化の境界を超えトランスナショナルに作用する持続・変容の可能性を示し、アメリカ西部研究の更なる地平拡大を目指す。

**【部会 B Transcultural Dialogues in the Age of War & Pandemic】 国際会議場 3 階第三会議室（本部会は早稲田大学大学院国際コミュニケーション研究科発案の企画です。）**

Since the 1980s, Japan has promoted the so-called “internationalization” in so many areas including culture and cultural industry. Counted among the most successful cases is the opening of the Tokyo Disneyland in 1983, which accelerated both cultural and economic interactions between Japan and the United States. In fact, it is not just Japan that promoted cultural exports and imports: we can find more recent examples in hot pop-cultural events such as Comic-Con International in San Diego, which started already back in 1970. Also, more people are enjoying global tourism, despite the COVID pandemic, recently. These examples illustrate the extent to which globalization has been advanced for the last several decades.

In this session, our focus is on whether this process of globalization is ever lasting. Though people are back on international travels after all, a war is going on in Eastern Europe with another war under way in the Middle East. We also have this on-going problem of trade frictions between the East and the West, which some argue would possibly lead to another Cold War or at least some regional conflicts in the not-too-distant future. In addition to them, the world economy is slowly decelerating with sticky inflation. These might make people rather conservative and even discourage them to make another cross-cultural adventure in the long run. Keeping these socio-political concerns in mind, we will analyze recent examples of transcultural dialogues in the field of culture and media studies and try to see their effects, both positive and negative, in our life for the rest of this decade and beyond.

\*Part of this session is supported by Grants-in-Aid for Scientific Research (C) 21K00377.

Chair: Takashi Aso 麻生享志 (Waseda University 早稲田大学)

Discussant: Mike Fu (Waseda University 早稲田大学)

Speakers:

Mitsuhiro Yoshimoto 吉本光宏 (Waseda University 早稲田大学)

“From *Shin Godzilla* to *Godzilla Minus One*”

*Godzilla Minus One* (『ゴジラ-1.0』, 2023) just won an Academy Award for best visual effects. It also became the most successful Japanese live-action feature film in the US,

grossing over 56 million dollars (or 51% of its worldwide earnings), which is, as of this writing, more than the film's domestic grosses of 43 million dollars. While *Godzilla Minus One* has been well received by Japanese audiences, it was *Shin Gojira* (『シン・ゴジラ』, 2016) that became a real social phenomenon when it was originally released. At the domestic box office, *Shin Gojira* earned over 75 million dollars, which comprised a staggering 96.7 percent of its worldwide grosses in contrast to 1.9 million dollars or 2.5 percent at the US box office. What accounts for the stunning difference between Japanese and American audiences' reactions to *Shin Gojira* and *Godzilla Minus One*? In my presentation, I will reflect on the panel's topic "Transcultural Dialogues in the Age of War & Pandemic" by thinking through some of the critical issues raised by the texts and contexts of the two recent Gojira/Godzilla phenomena in Japan and the US. The narratives of both films are formally straightforward, yet the representation of historical time in each film is quite complex and ambiguous. What differentiates *Shin Gojira* and *Godzilla Minus One* is their stance on "reality." Whereas *Shin Gojira* makes bets on the reality of text, *Godzilla Minus One* is preoccupied with textualization of reality. By giving particular attention to the films' treatment of war, nuclear disaster, and pandemic as an interface between text and reality, I will try to illuminate the significance of different responses that the two films elicited from the audiences in Japan and the US.

Takashi Aso 麻生享志 (Waseda University 早稲田大学)

"The Formation of Transpacific Vietnamese American Studies in the early 21st Century"

Since the fall of Saigon in 1975, a large number of Vietnamese moved out of the country, mostly from the South, to look for another place to live. It is said that about 800,000 people settled overseas between 1975 and 1995, and in the United States, the population of Vietnamese refugees including the second generation totaled more than 2.3 million today. These people have contributed to building a new type of culture where they articulate their wartime and refugee experiences in one way or another. In this presentation, I first trace the ways in which what is known as Vietnamese American culture has been formed for the last thirty years or so and draw attention to the socio-historical background against which this new culture has been built and developed.

Vietnamese Americans make one of the most recent, and most active immigrant/refugee groups in the United States. Historically, Chinese and Japanese had moved to the States from Eastern Asia to constitute large Asian population bodies since the second half of the nineteenth century and yet they had to wait until the late 1960s or the early 1970s to claim the unique place of their own culturally, socially, and politically in what is known as the Asian American movement.

On the other hand, Vietnamese Americans, having come to the United States in the late 1970s and after, did not go through this struggling phase, though they faced severe discrimination as war refugees. The history of their exodus and transpacific migration corresponded to the time in which postcolonial theories as well as multi-cultural ideas were accepted in the U.S. academia. This helped the scholars to pay attention to Vietnamese American culture from the early stage of its development. Also, more recently, out of this emerging Vietnamese American studies has come an interdisciplinary field of critical refugee studies, and the researchers regard refugee lives as a critical space in which processes of displacement and replacement, as well as those of assimilation, should be reinterpreted. To trace the history of Vietnamese resettlement in the United States, I suppose, would clarify this process of transcultural dialogues over refugee lives in the wake of the war.

Porranee Singpliam (Chulalongkorn University)

“Raewyn Connell and the Performative Gender of Governance: Crony Patriarchy as Mediated by Popular Press”

This research employs a content analysis of Thai popular press through Cultural Studies and gender approach, masculinity theory specifically. It seeks to explore the masculine institutions unique in the local Thai setting. It also wishes to find out what preserves asymmetrical gender order of Thai society. Both of which delves into gender of governance with androcentric frame of reference at the center. Drawing after Raewyn Connell’s theoretical lens and gender conceptions, which emphasize the understanding of gender as a social structure, this paper argues that the Thai patriarchy keeps its cronyistic manner alive, but with a newfound masculine modality that makes neoliberal masculinity and loyalty to the nation defensible, and even visionary. This research underlines a change in the governance of gender through empirical data such as the Cabinet members (and their politics of acts) of the current government, the topic of same sex marriage, health and wellbeing amid pandemic, and military conscription.

Rei Magosaki 孫崎玲 (Chapman University)

“Native American Presence in Japanese American Wartime Incarceration”

Narratives of globalization often go hand in hand with alienation from local histories, and wartime incarceration of Japanese Americans during WWII is one such example in Karen Tei Yamashita’s globalization novel, *Tropic of Orange* (1997). New literary works continue to be published around the trauma of mass dispossession and wartime incarceration by writers of WWII Japanese American incarceration, showing how the historic event continues to shape the lives of incarcerated families and their descendants

just as powerfully as economic structures of globalization permeates everyday life. Of particular interest is the writers' engagement with indigenous U.S. history, and how they perceive the concerns of an immigrant diaspora connect to Native American history. Jodi Byrd has observed that Japanese American incarceration is a "recursive colonialism that, during WWII, served to enjamb Japanese American detainees within the histories of containment and expropriation that strip lands and nations from American Indians," but how did Japanese American writers express solidarity in literary expression? I ultimately argue that engagement with Japanese American wartime incarceration literature opens up a way to approach the more recent rapid expansion and consolidation of the U.S. national security state in the twenty-first century, concurrent with the dynamic forces of globalization.

休憩	12:30~13:00	
新理事会	12:30~13:00	国際会議場 1階井深ホール
総会	13:00~13:30	国際会議場 1階井深ホール

#### 午後の部

部会・ワークショップ 13:40~16:40

**【ワークショップ B ASA-JAAS Workshop: Climate Change, "Natural" Disaster, and Global Unrest】** 国際会議場 3階第一会議室

Chair: Kyoko Hearn Shoji ハーン小路恭子 (Senshu University 専修大学)

Discussant: Kei Hinohara 日野原慶 (Daito Bunka University 大東文化大学)

Speakers:

Julie Sze (ASA, University of California, Davis)

"Stories from the Frontline: Resistance, Reparations and Restorative Climate Justice"

This paper is drawn from *Climate Justice as Freedom*, which asks: what is the role of hope and imagination in dark times related to climate disasters? How and where might glimmers of justice be found in the wake of terrifying climate realities now and futures yet to come? What is the role of climate reparations in our shared collective planetary futures? The paper focuses on the climate justice movement and its interpretive view of power, history and knowledge. Climate justice movements, comprised and led by people of color, indigenous peoples and the poor, what they call the People of the Global Majority, prioritize the voices and perspectives of those *most impacted* and *least responsible* for harms. A just world is a *remade world* that takes decolonial, feminist, and abolitionist perspectives as their base for climate struggles to overturn ongoing legacies of colonialism and anti-blackness, labor

exploitation, and the continuing abuse of “nature.”

Climate justice posits a worldview, proffering stories of freedom that that which currently exists in political, economic and cultural systems. The US (with its military apparatus) is responsible for 25 percent of *cumulative* carbon emissions since 1750. The tension between beauty and the existing horrors of climate injustice can be seen everywhere in cultural production (poetry, hip-hop, social media). This story-telling (in Marshallese diasporic teens, Indigenous sound artists, muralists) generatively imagine freedom and resistance in a world on fire, facing flooding, droughts and ocean death. Climate justice movements *envision* and *act* upon their non-naïve radical hope built upon capacious foundations of art, love, creativity, restoration, political resistance, collaborative relationships and humor in this calamitous global present. This paper examines these songs, art and culture of climate justice that seek to restore balance in a world in crisis.

Iyko Day (ASA, Mount Holyoke College)

“Nuclear Power and the Waste Theory of Value”

From Christopher Nolan’s 2023 feature film *Oppenheimer* to Oliver Stone’s 2022 documentary *Nuclear Now*, films devoted to the Manhattan project or green nuclear energy consistently evade the subject of uranium extraction. Uranium mined in the Belgian Congo and the Northwest Territories in Canada was used to produce the atomic bomb that was tested in New Mexico and detonated over Hiroshima almost 78 years ago. Although Indigenous land and labor are actively disconnected from nuclearism and nuclear modernity, it is largely Indigenous people across the globe who suffer the effects of the entire nuclear fuel cycle, from uranium mining and refining to nuclear power and weapons testing. When mines are shut down, Indigenous communities are left with lands and waters contaminated by nuclear waste, which remains radioactive for millennia. My paper demonstrates how the uranium supply chain, as a key resource in the production of energy and military power, reveals the intimacy and “unnatural” coproduction of war and climate disaster through a theory of racial capitalist crisis. Drawing on Cedric Robinson’s formulation of racial capitalism in *Black Marxism* and Kozo Uno’s theory of capitalist crisis, I argue that the production of capitalist surplus constitutes the necessary excess and waste product of imperial dominance, one that has historically culminated in nuclear crisis.

My paper demonstrates how wastelanding is a core expression of colonial racial capitalism. I approach the production of waste as both a reference to racialized surplus populations and devalued environments. I demonstrate how waste operates effectively as what Gabrielle Hecht calls an “interscalar vehicle,” offering a means of connecting stories and scales usually kept apart, boundaried, and divided. As an interscalar vehicle traveling

between scales of nuclearism, waste is an aesthetic medium that foregrounds the circulation of capital and the production of surplus land and people.

Kyoko Matsunaga 松永京子 (Hiroshima University 広島大学)

“Aridity, Nuclearism, and Literary Imagination of the “Desert” Southwest”

As many scholars and activists have pointed out, it is not a coincidence that uranium mining, nuclear testing, nuclear facilities, and nuclear waste sites are located in the “desert” of the American West. The Acoma Pueblo poet Simon J. Ortiz critiques the episteme repeatedly used (read abused) to justify settler-colonialism in the arid and semi-arid regions, of which trans/national nuclearism is one episode: “This was the remote barren west after all, and only a few Indians were there.” As depicted in works by Ortiz and other writers, “deserts” are far from barren—they are vibrant ecosystems where people, animals, plants, mountains, rocks, water, and other materials interact. However, by being described with terms such as “remote” and “lifeless,” “deserts” were rendered “empty spaces” without agency and became targets for extraction of (natural) resources, dumping grounds for toxic and radioactive materials, and sites for the depletion and contamination of water.

Water is a key element of nuclearization in the “desert” Southwest. Just as nuclear power plants require large amounts of water (this explains why nuclear power plants are located along shores of large bodies of water or river banks), uranium mining and milling are water intensive operations. Contamination of water is as detrimental as water depletion for those living on the Navajo nation as can be seen in the case of the Church Rock radioactive spill into the Rio Puerco on July 16, 1979. In a time of climate crisis, when the world’s freshwater resources are at risk, nuclear energy is not a viable solution. It further complicates the situation.

Following recent studies of new materialisms such as Iovino and Oppermann’s “material ecocriticism,” Cohen and Duckert’s “elemental ecocriticism,” and Stacy Alaimo’s “transcorporeal materialism,” Jada Ach and Gary Reger state in the introduction to *Reading Aridity in Western American Literature* that “desert matter is, in fact, rich in story.” Inspired by these works, this paper explores the intersections of aridity, nuclearism, and literary imagination of the “desert” Southwest, focusing particularly on works by Leslie Marmon Silko. Silko not only reveals how water—or how we perceive or interact with water—affects the ways trans/national nuclearism in the arid Southwest operates, but also offers ways to readjust settler-colonial perceptions of “deserts” by acknowledging the biodiversity, adaptability, and vulnerability of the arid and semi-arid Southwest. After all, the “desert” is an actor filled with “vibrant material,” affecting and affected by the climate unrest.

### 【部会 C 越境するマイノリティ研究】国際会議場 3 階第二会議室

アメリカ合衆国（以下アメリカ）での批判的人種研究やエスニックスタディーズの出現以降、アメリカ文化・社会における制度的レイシズムの問題が学術分野でも論じられるようになってきた。制度的レイシズムに批判的に取り組むことを通じて社会正義を獲得しようとする動きは、学界における既存の研究枠組みの変容や変質を促すだけでなく、交差的かつ学際的研究の発展をもたらし、さらには実社会でのさまざまな社会変革を促してきた。

2044 年にはヒスパニックではない白人がマイノリティの一集団となると想定されているなかで、アメリカにおけるマジョリティとマイノリティの関係も大きく変化してきた。ヒスパニックではない白人が 50%未満のマイノリティ・マジョリティ州（従来の多数派が少数派である州）が存在するなど、人口における人種・エスニシティ構成は大きな変化を迎えている。このような人口構成の変容に伴い、さまざまな州において初等・中等におけるエスニックスタディーズカリキュラムの提供の是非をめぐっての議論が活発化し、教育カリキュラムの内容が政治問題化される地域は、1980 年代以降の多文化主義論争を彷彿とさせる。

本部会では、日系史の展開とその課題、在日コリアン研究の変遷とインターセクショナルリティ、ブラック・ディアスポラの想像力の環太平洋的広がりと境界についての各報告を通して、アメリカでのマイノリティ研究の進展に目を向けつつ、マイノリティ研究の課題も論じる。そして先住民研究の視点から、そうした移民マイノリティ研究の可能性と課題について討論者が提起する。越境的視点からアメリカの事例を扱う研究と日本の事例を扱う研究との対話を意識しつつ、登壇者には日米のマイノリティ研究を架橋する試みについても言及してもらう予定である。

司会：佐原彩子（共立女子大学）

討論者：石山徳子（明治大学）

報告者：

徳永悠（京都大学）

「在米日系人の経験と環太平洋史研究」

近年、「環太平洋（transpacific）」という歴史的空間を意識した在米日系人史関連の研究が増えてきている。本報告は、近年アメリカで出版された在米日系人史関連の書籍の中から、“transpacific”や“pacific”という言葉を書籍名に使っている先行研究の一部を整理したうえで、報告者自身のこれまでの研究を自省的に振り返りつつ、環太平洋史としての移民史研究の課題と可能性について考えてみたい。過去 5 年間に出版された在米日系人史関連の研究には、日本人の海外移住を奨励した日本人知識人らの思想を分析したもの、在米日本人社会に焦点を当てた越境的観点から映画産業の発展を捉え直したもの、幼少期に日本で教育を受けた日系アメリカ人二世の渡日移民史から「移民国家アメリカ」像を問い直したもの、日本人の移動に伴う植物や昆虫の移動がアメリカ国内で農業関連の学知を形成し

ていった過程などを明らかにしたものなどが含まれている。社会史にくわえて、思想史、映画史、環境史など多様な歴史学の下位分野にまたがっており刺激的である。こうした「環太平洋」という歴史的空間を意識した研究の多くは、史料的にも解釈的にも国民国家の枠組みを超えた視点から歴史を紐解いていくトランスナショナル・ヒストリー（越境史）の蓄積に負うところが多い。こうした先行研究をふまえながら、本報告では、①在米日系人史研究において日米関係という枠組みを超えて「環太平洋」という視点を生かすために、どのような研究が効果的であるか、②日本に拠点を置くアメリカ史研究者が、在米日系人史研究を含むアメリカのマイノリティ研究にある問題意識とどのように向き合うべきか、という点について問題提起したい。

李里花（中央大学）

「在日コリアン研究からみるマイノリティ研究の現在——関係論的アプローチへのシフト」

新型コロナウイルスの拡大とともに、アメリカ合衆国（以下アメリカ）ではアジア系の人びとに対する憎悪や攻撃（以下アジアン・ヘイト）が相次ぎ、とりわけ高齢者や女性は暴力に晒されることが多かった。非営利団体「ストップ AAPI ヘイト(#STOP AAPI HATE)」は、高齢者や女性が暴力に遭遇するリスクは2倍以上に及ぶことを報告している。

日本においても2000年代からヘイトスピーチが国内で急速に高まった。2016年のヘイトスピーチ解消法の成立によってヘイトデモは法的に規制されたものの、その後インターネットやSNSの世界でマイノリティに対する罵詈雑言が過激化し、近年はネットのヘイトがリアルな世界の憎悪犯罪につながる事件も起きている。このようなヘイトの波の中でとりわけ熾烈な攻撃を受けたのが、在日コリアンの女性であった。

本報告は、アメリカのアジアンヘイトを念頭に置きつつも、在日コリアンの事例に注目することで、日本のマイノリティ研究が問われている課題を浮き彫りにする。特に在日コリアン研究は戦後の日本における在日外国人をめぐる制度的差別と闘ってきた社会運動と連動する形で発展してきた研究分野である。しかし近年の在日コリアン女性に対する攻撃が強まる中、新たな抵抗の形も生まれ、「複合差別」や「インターセクショナリティ」についての新たな研究分野も発展している。このような在日コリアン研究の変化に注目することによって、日本のマイノリティ研究において問われる課題を浮き彫りにし、ヘイトによって深まった人種や民族の分断、さらにマイノリティ女性がターゲットとなっていくような日米の共時的な状況に求められる研究の視点を検討する。

松坂裕晃（立命館大学）

「帝国を伝う詩——クロード・マッケイ「もし死なねばならぬなら」の朝鮮語訳と日本語訳」



本報告は、詩作品の「越境」を読み解きつつ、いわゆるアフロ・アジア研究の角度から、マイノリティ研究と帝国研究をつなぐ視点を提起することを試みる。主な素材とするのは、イギリス植民地だったジャマイカ出身のブラック・ディアスポラ詩人クロード・マッケイ（1889-1948）が、1919年に最初に発表した詩「もし死なねばならぬなら（If We Must Die）」である。特に、その改稿と翻訳のあり方や、アメリカ、イギリス、日本という〈帝国〉をまたがる文脈に着目しつつ、詩を介した通時的かつトランスナショナルな思想の展開を検討してゆく。

「もし死なねばならぬなら」は、アメリカの大学や高校の教材として使用されることがあるほど広く知られた詩であり、人種暴力をはじめとする社会的抑圧に対する抵抗の詩として紹介されることが多い。現在よく知られているのは複数の改稿を経たあとの詩であるが、それらの修正は一見するとあまり大きなものではないため、ほとんど分析対象にされてこなかった。まず本報告では、この改稿がどのようなものだったかを示したうえで、その改稿の意味合いをテキスト間の差異やつながりに注目しながら分析する。

また本報告では、「もし死なねばならぬなら」の詩の言語横断的な広がりを示す朝鮮語ならびに日本語の翻訳についても考察する。この詩は、日本の植民地支配を受けていた朝鮮からシカゴに留学しており、のちに独立運動にも関わった金泰善（1903-77）が、マッケイの他のいくつかの詩とともに翻訳し、1932年にソウルで出版されていた月刊誌『三里』上で発表した。その前年の1931年には、詩人・小野十三郎（1903-96）が、東京で出された翻訳詩集『アメリカプロレタリア詩集』の一篇として、「どうせ死ぬなら」というタイトルで訳出していた。本報告では、これらのテキストと「原文」を比較しつつ、翻訳を、帝国や植民地の文脈で訳者が意味解釈を提示してゆく能動的な実践として検討する。

#### **【部会D アメリカの国際関係史・外交史と民間団体】国際会議場3階第三会議室**

アメリカの国際関係史・外交史研究は、方法論や分析視座の点において他の歴史研究の分野に立ち遅れてきたという評価が長らくされてきた。しかし近年においては、冷戦史研究にみられるように、社会史や文化史の分析視座や方法論等を取り入れながら、その研究上のフィールドの新規開拓や多様化も見られるようになった。

そのような傾向を反映して、アメリカの国際関係史・外交史研究は、ホワイトハウスや国務省・国防総省を初めとする行政府や官僚組織によって担われてきた「国家」対「国家」の関係だけではなく、アメリカ市民社会の多様な民間団体（例：シンクタンク・研究所、財団、国際NGO、メディア、労働組合、消費者団体等）が、その人的・財的資源を動員しながら、アメリカ政府による外交政策の策定過程に如何なる影響を与えてきたのかに関して注目した研究もなされてきている。このような視角は、いわば外交政策における「国家」－「(市民)社会」の関係に主な分析視角を置いた研究であると言える。

本部会では、以上のような問題関心から、発展途上国に対する開発援助政策における助成財団の役割、民主化支援や人権に関わる外交政策の策定・実施の際の世論形成に影響を

与える NGO 団体、シンクタンクの政策形成アクターとして役割、を事例として取り上げ、多様な価値観・国際秩序観をもった民間アクターが、外交政策実施のインフラとして、アイデア・ブローカーとして、また世論喚起の圧力団体として、アメリカ政府の外交政策の形成に如何なる影響を与えてきたのかを歴史的視座から検討する。またその際、これらの民間団体がどのようなイデオロギー（価値観、信念、世界観）や自国像（使命感を含む）を抱きながらグローバルな国際関係の領域に参入していったのかという点に関して、その行動の文化的・社会的・思想的基盤に注意を払いながら検証することを目指したい。このような作業を通じて、国際社会に対するアメリカの対外関与の特徴を、アメリカ社会の性格と関連付けながら複眼的に把握することが期待できるであろう。

司会：三牧聖子（同志社大学）

討論者：小野沢透（京都大学）

報告者：

佐藤真千子（静岡県立大学）

「アメリカの国際 NGO は人権アドボカシーと外交政策をどう変えてきたか」

本報告は、人権に関心を寄せる NGO が、アメリカの外交政策決定に重要なアクターとして役割を果たすようになり、アメリカ人権外交が影響力を発揮するように働きかけてきたのかを考察する。人権 NGO は、1940 年代はニューヨークを拠点とするアメリカ社会のエリート集団として存在していたが、1960 年代になると一般市民による社会運動及び活動家集団として存在力を高めていくようになる。その要因として、国内においては冷戦コンセンサスの崩壊、国際的環境においては脱植民地化や人種差別撤廃宣言など国連を舞台にした人権議論、英国で誕生したアムネスティ・インターナショナル(AI)のアメリカでの拠点設置といった影響があった。1970 年代以降、人の国際移動の増加が国境を超えた人的つながりをもたらし、トランスナショナルな NGO 活動に突き動かされる形でアメリカ政府が人権 NGO と相互作用しながら人権外交の制度化が進む。

そのような人権 NGO の展開を踏まえて、現在のアメリカ人権外交の代表的なツールである 2016 年 12 月に制定されたグローバル・マグニツキー法の制定過程及びそれに続く行政命令の運用の実態に焦点を当てる。アメリカ政府は人権侵害行為に関わった人物と団体を制裁対象に指定する際、その根拠となる情報提供を含む NGO の協力が欠かせない。開かれた市民社会を政策決定過程に取り組みれば、アメリカの対外的な人権政策が国内外で高い信頼を得て、より実効性の伴うものとなることが期待されたからである。同法は、トランスナショナルな市民社会からのボトム・アップ型で立法化され、人権 NGO の関与なしには機能しえない仕組みになっている。しかしながら、人権 NGO とアメリカ政府が共通して唱える「普遍的」な人権の価値への対応の齟齬、人権問題の深刻さの度合いや争点をめぐって NGO がせめぎあう問題も浮き彫りとなる。

奥田俊介（名古屋外国語大学）

「民間財団は『独立した』アクターか？——1960年代のフォード財団とアメリカ政府の関係性を例に」

本報告は、1960年代の東アフリカ高等教育（主として東アフリカ大学に向けたもの）に対する援助活動の事例におけるフォード財団と米政府の関係性に注目し、外交史研究において米国の「民間財団」というアクターはどのような位置付けが与えられるかを考察することが目的である。

入江昭が指摘するように、これまでの国際関係史・外交史研究においては、アナーキーな世界観を前提とする「国家」の活動の考察を中心に据えた研究が多くを占めてきた。しかし近年、そのような国際環境の中にも「社会」としての秩序が存在するというヘドリー・ブルの議論を援用し、その中で動く国際機関や民間財団などの「非政府組織」に焦点を当てる研究が、世界だけでなく日本でも着実に増えてきた。

本報告では、非政府組織の中から米国の「財団」を考察対象として選択し、1960年代に全米一の財団に成長し、対外援助に多大な貢献をしたフォード財団の、1960年代における対東アフリカ高等教育援助に焦点を当てる。望ましい援助活動地域の調整を行うなど、1950年代は米政府と近い関係を築いたこの財団であったが、1960年代半ば、前大統領特別補佐官のマクジョージ・バンディが理事長に就任したのち、対外援助の方針をめぐって米政府との対立が深まった。本報告では、まずこの対立の内実を詳細に確認する。そのうえで、政府の人間や政府の補助金を受け入れるなど、「非政府組織」であるとはいえ政府との強い関係を持った米財団の活動が、米国の対外政策の中でいかに位置付けられるかについて考察を行う。言い換えるならば、財団という組織の活動を「非政府組織」という政府から独立したアクターとして捉えるべきか、もしくは政府との関係を強調すべきなのかを、フォード財団の活動を事例に考察することで、財団の対外活動に関する研究を発展させるうえで検討が必要になるであろう論点を提示することが、本報告の大きな目的となる。

宮田智之（帝京大学）

「トランプ現象と保守系シンクタンクの変容」

アメリカのシンクタンクについては、政策論議に影響力を及ぼしているアクターのひとつとの見方が支配的である。しかし、その発達を通じて、逆にシンクタンクの側が政治の影響をますます受けやすくなった側面については、従来の研究において注意が払われていない。

アメリカ政治の分析においてシンクタンクの存在が広く認識されるようになったのは、1980年代以降のことである。70年代に入り、シンクタンクが政府や議会への政策案・人材の供給源としての役割を本格的に担うようになり、また同じ時期を境に、保守派の政治インフラとしてアドボカシーに力を入れる保守系シンクタンクが急速に整備されていっ

た。こうして、外交政策を含むアメリカ政治の動向において、シンクタンクはより目立つ存在へと発達を遂げた。シンクタンクのための資金源も拡充し、財団だけでなく、大企業や外国政府からも莫大な寄付を獲得するようになった。

一方で、政府や議会、そして企業などとの間でより密接な関係を持つようになったことは、シンクタンクが政治環境の変化にますます左右されやすくなったことを意味し、なかでもイデオロギー系シンクタンクにおいてその傾向が観察できる。近年の保守系シンクタンクの変容は、その端的な例である。2016年大統領選において、当初保守系シンクタンクはネバー・トランプ派の中核的拠点として機能した。特に在籍する外交安全保障の専門家は、トランプの孤立主義に抵抗し反トランプ書簡まで発表した。しかし、現在保守系シンクタンクはネバー・トランプ派の拠点とは言い難い。大々的なトランプ批判の声は見られず、保守派を代表するヘリテージ財団に至っては、ウクライナ支援をめぐってもトランプの主張に同調している。本報告では、シンクタンクの発達過程を分析した上で、近年の保守系シンクタンクの変容を事例にシンクタンクが政治環境の変化に迎合する側面について考察したい。

#### 4. 注意事項

- 1) 今大会は、分科会（オンライン開催）を除き対面のみでの開催となります。オンラインでの配信はありません。ご注意ください。
- 2) 大会参加登録は、学会ウェブサイトの大会参加登録ページ上で、必ず2024年5月19日（日）までをお願いいたします。参加登録ページのURLは、アメリカ学会会員用メーリングリストにて配信いたします。会員の方でメールが届かなかった方は、「迷惑メール（junk mail）」フォルダもご確認ください。見つからなかった場合は、お手数をおかけして大変申し訳ございませんが、学会HPの「お問い合わせ・応募フォーム」の年次大会企画委員会までご連絡ください。
- 3) 大会期間中、キャンパス内の食堂は使用できません。
- 4) 今大会は懇親会を開催いたしませんのでご了承ください。

#### 5. 会場案内

受付 国際会議場 1階ロビー

大会本部・役員控室 国際会議場 3階市島会議室

会員控室・外国ゲスト控室 国際会議場 4階共同研究室1～3

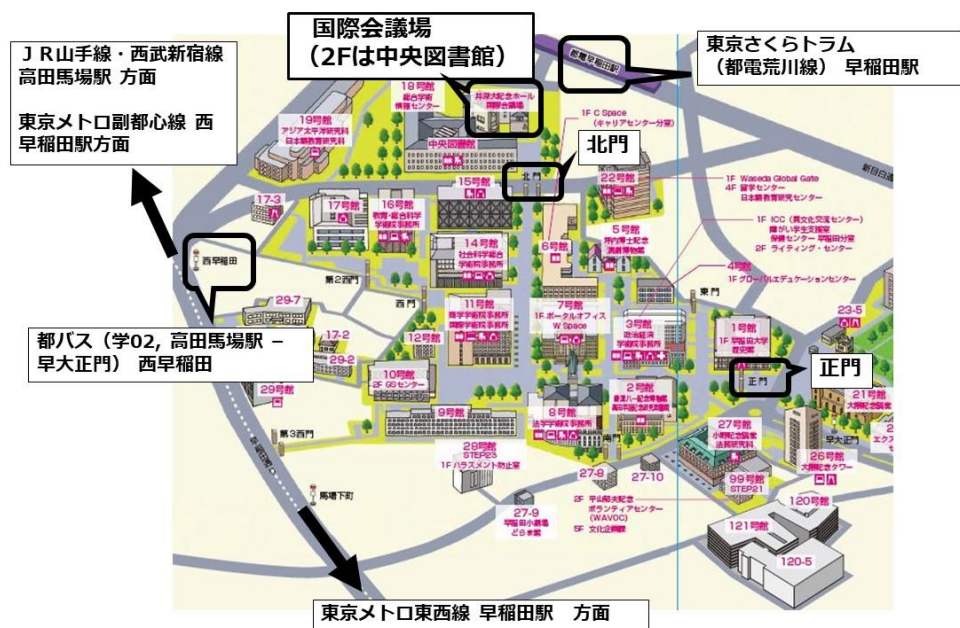
賛助会員（書店）ブース 国際会議場 1階ロビー

<早稲田大学早稲田キャンパスへのアクセス>

・JR山手線 高田馬場駅から徒歩20分

- ・西武鉄道 西武新宿線 高田馬場駅から徒歩 20 分
- ・東京メトロ 東西線 早稲田駅から徒歩 5 分
- ・東京メトロ副都心線 西早稲田駅から徒歩 17 分
- ・都バス 学 02 (学バス) 高田馬場駅 - 早大正門から徒歩 3 分
- ・東京さくらトラム (都電 荒川線) 早稲田駅から徒歩 5 分

国際会議場は早稲田キャンパス「北門」の向い側にある中央図書館の建物の1階にあります。中央図書館を目印にお越しください。



## 第 58 回年次大会 分科会のご案内

\* 本大会の分科会はすべてオンラインでの開催となります。

\* 未定のスケジュール等については後日改めて通知いたします。

### 1. 「アメリカ政治」

責任者：松井孝太（杏林大学） kmatsui アットマーク ks.kyorin-u.ac.jp

報告 1：松本明日香（東北大学）「表現の自由とフェイクニュースの行方——2024 年米大統領予備選挙における SNS 論争」

報告 2：宇野正祥（東京大学・院）「アメリカ保守主義政治運動における政策的立場の断続的平衡」

開催日時／形式：5 月 31 日（金）19：00～20：40／ZOOM で開催（URL 等は後日連絡）

本年度のアメリカ政治分科会は、2 名の会員より、アメリカ政治の各分野における最新の研究成果を報告いただく。松本会員は、アメリカのメディア選挙におけるフェイクニュース前史と理論的背景を整理した上で、フェイクニュースがより悪化するといわれる 2023 年影の予備選挙から 2024 年予備選挙における相反する「表現の自由」と「フェイクニュース」の様態を、①SNS 凍結・解禁、②予備選挙討論会不参加、③TikTok 禁止法案と Z 世代などの観点から論じる。宇野会員は、アメリカの保守主義政治運動の K-12（初等・中等）教育領域における政策的立場の変遷を事例とし、独任制行政長官（大統領／知事）の予備選挙に着目して、政治的価値に基づく政策革新・制度変化を志向するイデオロギー的政治運動におけるイデオロギーと政策的立場の対応関係の形成と変化のモデルを提示する。

### 2. 「アメリカ国際関係史」

責任者：吉留公太（神奈川大学）ft101846cs アットマーク jindai.jp

報告者：青野利彦（一橋大学）「『冷戦史』の執筆意図と主要論点」

討論者：菅英輝（大阪大学、九州大学）

開催日時／形式：6 月 7 日（金）18：00～／ZOOM で開催（URL 等は後日連絡）

青野会員の著書『冷戦史』（上、下、中央公論新社、2023 年）は、アジアと日本の動向にも目配りしつつ近年の研究成果を踏まえた冷戦の通史を提示している。

執筆意図と主要な論旨を知るとともに、討論者をはじめとして分科会参加者が本書を批評することで冷戦史研究をさらに発展させるための手がかりを得る機会としたい。

### 3. 「日米関係」

本年度休会

### 4. 「経済・経済史」

責任者：手塚沙織（南山大学） satezuka アットマーク nanzan-u.ac.jp

報告者：加藤一誠（慶応義塾大学）「“The Big Sort” と交通インフラの近隣効果」

開催日時／形式：5月31日（金）18：00～／ZOOMで開催（URL等は後日連絡）

今日、交通インフラの維持管理や更新とその財源調達は日米共通の課題となっている。本報告の問題意識の端緒は、州によって道路状態に差がある理由は何か、ということにある。報告者のパネル分析によれば、州別の道路状態に、連邦政府の投資順位のガイドラインや隣接州の政策が影響を与えている。つまり、ある州の道路状態が良ければ、隣接州の道路も改善される。ここに、住民の投票行動がもたらす影響が示唆される。

また、共和党支持者と民主党支持者の交通への選好は分かれ、たとえば、共和党支持者は道路整備を選ぶ。こうして、ビショップの観察した移住による同一政党支持のコミュニティ形成は、交通政策にも色濃く反映される。

本報告では、地理的近接性が交通政策に及ぼす影響を議論したいと考えている。

## 5. 「アジア系アメリカ研究」

責任者：和泉真澄（同志社大学） mizumi アットマーク mail.doshisha.ac.jp

報告者：Emily Anderson エミリー・アンダーソン（Japanese American National Museum 全米日系人博物館）「食文化」を通じて新たに探る日系文化——全米日系人博物館の最新プロジェクトの紹介」“Introducing JANM’s New Multi-Year Project: New Approaches to Exploring Japanese American Culture Through Food”

開催日時／形式：5月31日（金）18：00～19：30／ZOOMで開催（URL等は後日連絡）

人間にとって食べ物の重要性は言うまでもない。栄養の元以上に、食事は文化、アイデンティティー、歴史、思い出など、さまざまな意味が重なったものでもある。特に今のアメリカでは、日本食・和食の世界的人気に伴い日系アメリカ人の食文化も注目されるようになっていく。日系アメリカ人と食べ物との関係は単に日本を離れた日本食の話ではない。移民としての経験、移住前と後の環境、子孫に伝わった食べ物にまつわる「物語」・神話、食べ物の違いや珍しさから生じた差別や偏見など、食べる物を通していろいろなものが見えてくる。本発表では、まだ史料集めが始まったばかりのプロジェクト、2027年に全米日系人博物館で開催予定の展示の現時点の計画などを紹介する。

## 6. 「アメリカ女性史・ジェンダー研究」

責任者：鈴木周太郎（鶴見大学）：suzuki-s アットマーク tsurumi-u.ac.jp

報告者：並河葉子（神戸市外国語大学）、貴堂嘉之（一橋大学）、鈴木周太郎（鶴見大学）

「フィリッパ・レヴァイン『イギリス帝国史: 移民・ジェンダー・植民地へのまなざしから』（並河葉子、森本真美、水谷智訳、昭和堂、2021年）合評会」

開催日時／形式：5月31日（金）19：30～21：00／ZOOMで開催（URL等は後日連絡）

絡)

イギリス近代史研究の並河葉子氏をお招きし、フィリップ・レヴァイン『イギリス帝国史: 移民・ジェンダー・植民地へのまなざしから』についての合評会をおこなう。イギリス帝国の興亡について、奴隷制／奴隷貿易やジェンダーとセクシュアリティ、あるいは植民地経営とそれへの抵抗といった観点に着目し、社会的・文化的側面を含め詳細に検討された同書について、まずは訳者の一人である並河氏より紹介していただく。その後、貴堂嘉之会員と鈴木周太郎会員より書評コメントを発表し、並河氏による応答後、フロアと質疑応答およびディスカッションをおこなう。女性史、ジェンダー史、奴隷制史、帝国主義、グローバル・ヒストリーなど、広範な関心を持つ会員による活発な議論を期待したい。

## 7. 「アメリカ先住民研究」

責任者：佐藤円(大妻女子大学) mdsato アットマーク otsuma.ac.jp

報告者：小澤奈美恵 (立正大学) 「ピークォット族の作家ウィリアム・エイプスと19世紀の権利拡張運動」

開催日時／形式：5月31日(金) 19:00~20:30 / ZOOM で開催 (URL等は後日連絡)

19世紀にピークォット族のメソヂスト派の牧師として著作活動を行ったウィリアム・エイプス(1798-1839)の紹介を行い、同時代の権利拡張運動との関連性を考察する。エイプスは自伝や説教、マシュピー・ワンパノアグ族の諸権利獲得運動の記録、フィリップ王戦争で滅ぼされたワンパノアグ族の首長フィリップ王メタカム再解釈の書などを残した。こうしたエイプスの業績を、1830年代のチェロキー族の強制移住反対運動や奴隷制廃止運動の隆盛との関係性の中で捉えなおしていく。これらの運動には、人種・ジェンダーの多様性がみられ、白人知識人だけでなく、先住民、アフリカ系、混血の人々など多種多様な人々が関わり、女性も発言権を拡張しようとしていた。征服された先住民が、支配者の言語である英語やキリスト教、啓蒙主義思想を武器として、逆に先住民の当然の権利を明らかにしていく手法は、多民族国家アメリカを形成する源流と言える。

## 8. 「初期アメリカ」

責任者：鰐淵秀一(明治大学) swanibuchi アットマーク meiji.ac.jp

報告者：佐藤清子(東京大学) 「アメリカはキリスト教国家として建国されたのか——キリスト教右派の歴史認識をめぐって」

討論者：佐々木弘通(東北大学)、森本あんり(東京女子大学)

開催日時／形式：6月8日(土) 14:00~15:30 / ZOOM で開催 (URL等は後日連絡)

今年度の初期アメリカ分科会は、佐藤清子氏をゲストに迎え、現代のキリスト教右派に共有される「キリスト教国論」の検討を通じて、ジェファソンに代表される建国父祖の



「当初の意図」をめぐる合衆国の歴史認識問題についてお話しいただく。建国父祖が合衆国をキリスト教国 Christian nation として制度設計を行ったという理解に基づくキリスト教国論は、合衆国憲法修正第 1 条で定められた政教分離の解釈に変更を迫る可能性を持つ議論であり、歴史認識問題にとどまらず、合衆国の政教関係そのものに大きな影響を及ぼす危険性を持つ。まず佐藤氏に、2023 年に下院議長に就任したマイク・ジョンソンの発言や宗教保守派による独自の歴史教科書などの検討から、その内容と影響力についてご紹介いただき、次いで佐々木弘通氏と森本あんり氏にそれぞれ憲法学と宗教史の立場からコメントをいただく。歴史認識問題を通して、初期アメリカが現代合衆国における「過ぎ去らぬ過去」として持つ意味を参加者ととも考える会としたい。

## 9. 「文化・芸術史」

本年度休会

## 10. 「アメリカ社会と人種」

責任者：山本航平（就実大学） duchpb42 アットマーク gmail.com

報告者：児玉真希（獨協大学）「アンテベラム期のニューオーリンズにおける「見捨てられた」と呼ばれた女性たち——新聞記事から見る「例外主義」と人種間関係」

開催日時／形式：5 月 27 日（月）19：00～21：00／ZOOM で開催（URL 等は後日連絡）

本報告は、アンテベラム期に奴隷都市として繁栄したニューオーリンズにおける人種関係を「見捨てられた」女性たちの事例から照射し、「ニューオーリンズ例外主義」を再検討する。19 世紀に入ると多様な人がニューオーリンズに定住し、またそれ以上の人が行き交うミシシッピ川とカリブ海を結ぶ海港都市へと発展した。フランス系やクレオール、新たに移住したドイツ、アイルランド系の人々が住み、黒人グループは奴隷だけではなく自由黒人、または混血の人も多くいた。さらに、ハイチ革命後に流入した移民なども加わり、この多言語で複雑な人種関係こそ、ニューオーリンズは他とは異なるという「例外主義」の言説を作り出してきた。本報告では、この「例外主義」の意味を「見捨てられた」女性たちに関する新聞記事から、人種だけではなくジェンダー関係からその意味を考察する。その作業を通じて、人種間関係の線引きを不明瞭にする彼女たちの存在が、ニューオーリンズを「例外」にしていることを明らかにする。